

11 宮入慶之助——日本住血吸虫中間宿主の発見

宮入源太郎

宮入慶之助記念館

宮入慶之助は、日本住血吸虫病の原因である住血吸虫が、人体に寄生するまでの発育過程で一旦寄生する中間宿主である小巻貝を発見した。この発見により同病の防圧が可能になり、日本ではこの病気については安全であるとされるにいたっている。

1. 出生 宮入は、慶応元年5月15日に長野県北部の現在の長野市松代町西寺尾で松代藩の下級藩士である宮入敬長の三男として生まれた。父敬長は、松代藩の祐筆などを務め、佐久間象山とも交際があり学問に関心が高く、寺子屋を開いたこともある。

2. 進学 松代小学校を卒業してしばらく後の明治13年、15歳のときに、宮入は進学するために上京した。信州の山間の地から遠い東京へ行き進学の道を進むことができたのは、彼が幼少より学問に関心が高く東京への進学を希望したことと、松代藩解体の時のわずかながらの経済的余裕があったことで、父敬長が彼を進学させることを決断したことによる。上京後、松代藩士の子弟宮本 伸の下宿に世話になり、獨逸学校に入学、受験勉強をし、その秋東京大学医科の予備門に合格した。明治23年、帝国大学医科大学医学科を卒業した。

3. 就職 大学卒業後助手として残った後、京都府医学校教諭、第一高等学校教授、検疫局事務官、検疫局防疫課長などを歴任し、明治35年衛生学研究のためドイツに留学し細菌学者レフラーの元に滞在した。

明治37年留学から帰国し、京都帝国大学福岡医科大学（後に九州帝国大学）の衛生学教授に任命された。明治38年には医学博士の学位を受けた。以後、定年退官するまで同大学に在勤した。大学卒業時は、当時の卒業生が開業医になることが多かったのに対し、彼は自らの開業医としての適性が無いことを認め、それ以外の道を選んだといわれる。

4. 中間宿主発見 明治45年、宮入は助手として入局してきた鈴木稔とともに日本住血吸虫の研究を開始した。当時、北九州の筑後川流域に蔓延していた日本住血吸虫病の感染は謎とされていた。同門の戸塚文雄からの研究費寄贈もこの研究に大きく寄与している。宮入と鈴木は、当時の濃厚な流行地であった佐賀県基里村（現在の鳥栖市）を中心に動物への感染実験から研究を開始した。感染が成立する小川が見付からない中、小川の中を這っている小さな巻貝を見つけた。これを採取して研究室に持ち帰って調べたところ、この巻貝が日本住血吸虫の中間宿主であることをつきとめた。

この研究成果は大正2年に東京医事新誌1836号に2人の連名で発表された。そして翌年には九州帝国大学医学部紀要にドイツ語で発表された。この発見は海外の研究者に衝撃を与え、翌年英国の学者レイパー等は急遽日本に視察に来ている。英国の熱帯学者ブラックロックは昭和2年にノーベル賞候補に推薦している。

5. 晩年 大正14年に九州帝国大学を定年退官した宮入は、名誉教授となり、しばらくはツツガムシ病の研究などを続けていたが、昭和5年に東京に新居を建てて転居した。

2階建ての家の2階を研究室として独自に研究を続けた。その後2階建ての研究室も増築した。昭和14年に第2次世界大戦が、昭和16年に太平洋戦争が始まった。宮入は昭和17年に福岡にもどった。しかし、昭和20年の福岡への空襲で被災したため新潟へ疎開し、その頃から健康を害し、生まれ故郷の長野に移ったが思わしくなく、昭和21年に再び福岡にもどった。宮入が敬慕するドイツが降伏したとの報に接しての落胆ぶりは家族の語り草になっている。福岡にもどって間もなくの昭和21年4月6日、末っ子の守夫一家に見守られながら80歳の生涯を閉じた。

6. おわりに

宮入慶之助記念館では、宮入の人と業績について調査・収集・研究し、展示や出版をしている。